

倭学戴恩日記

一

26
5759
1



特
又 6
號 5259
卷 1



倭學戴息日記卷第一

天保二年八月十七日

平小山田與清稿



水戸乃相公殿様は清くは主人立原甚太郎名
らもさうせうと云ふ事も人々事やたつて行
まりしをてらるる事やとてし清くは
あつてがくくわいふで今日も清くは
清くは清くはと書かす事や清くは
清くは清くは清くは清くは清くは

昭和二年
高田早苗

九月廿七日
五日晴飯田氏より消息あり

五日晴飯田氏より消息あり

明六日四時

水戸殿小石川飯田氏

御紙より承り候

九月廿七日

飯田信藏

小山田持常

御紙

九月廿七日

石橋深田門下向

御紙

御紙より承り候小山田の御屋形を飯田氏より承り候
下たる先より御紙を承り候小山田の御屋形を飯田氏より承り候
九月廿七日

六日晴己の時より小山田御屋形は西南に御通
用門より承り候御紙を承り候九月廿七日

とて其臺の御假屋形は河中の口をまきりしむり
少坊士衆はつたなつて御客間を座も就ぬ相草
盆及薄茶をたふ河内朋河合瓢河弥してあひらふ
志げあまて富国富太郎 瓢久米彦助 博高 西人
出てふやういふとせんとせやうは門人もあつて侍を
はしむるなり

君命をうけおとす今もふとてはしむるなり
瓢阿弥をたふて果は一間所へ入る飯田氏

あまて

宰相殿様は仰どを所てはしむるなり富国富
太郎久米彦助兩人は侍の道致教授はしむる
一也はしむる史館はしむるなり二也はしむる
はしむる

御前にはなるといふもふ前日におもてはしむるなり
の御てそのんを得しむるなりとて白銀二枚はしむるなり
うしてはしむる席はしむるなり富国久米
はしむる出違て余が在着の日終日八日

本年家守御... 御暇は了ていふ館向... 瀬酒... 一献、吸物あり、二献、煮... 肴あり、三献、焼多あり、四献、椀飯一汁、三菜の... 富原... 久米... 後原...

後、焼物を引... 御暇は了ていふ館向... 瀬酒... 一献、吸物あり、二献、煮... 肴あり、三献、焼多あり、四献、椀飯一汁、三菜の... 富原... 久米... 後原...

ぬ

十三日晴久未もてこゝに職原抄を講授せり
十四日くもみ晴にやれりまはなす日なれ
ふゆふふふふふ今日この歌をよみて
と菊をよみて寄菊祝よめりも當座よ松の雜
題を出てふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

寄菊祝

戸川安鎮 兎御納戸衆
字鏗太郎
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

渡辺轉 寄合衆
字海左衛門
仙人とてまてやふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

天野政徳 少普清衆
字圖書
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
海なるまて

深江清海 少普清衆
字長次郎
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ

茅田部敬 平戸藩士
字古所門

うねりしるし一ふらふら代のたけやあふ海乃
葉まきしりちりり

吉村氏記 國藩士
字布部左門

あしつらふえんをさそりけいのふらふら
りちりり

貞方忠友 國藩士
字文作

あらし玉にがらるる苔のまじりて源よ方こそハ

ふもあふれり

水谷昌年 幕名藩士
以十吉

あふらふらうはらぬきまきまのふらふら
あふらふらふら

松山正幹 津藩士
玄同

あふらふらふらふらふらふらふらふら
あふらふらふら

松花重雄 山縣藩士
玄方大

あふらふらふらふらふらふらふらふら

とくはなすか。

畑時倚三日月馬

神原ささくくみのやあふちこいといふやう

畑時習教馬男

ふ菊は花のゆきと笑やう風さつれり
あぐ代の秋

猿渡盛章武蔵国所
神主近守

あゝ秋あえまきふとくふいともおろ

とくはなすか。

猿渡容盛迎は守男
豊後

あぐ代ははなすかといふのよりのあふ
あゝあゝあゝあゝ

小條時都鹿嶋祢宜
小備は圖書

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

藤原善一富子見御書
藤原経衡書

あぐ代はなすかあぐ代はなすかあぐ代はなすか

なげりーらさく

萩原正巳小善清
門次郎

ふゆのしののけの
こころのさけさる

山本達長御番守
吉次郎

霜のほろかりも
あつらひのつれ

関根方久同
次郎

はるかなるつらみ
なごりもなごり

はるかなるつらみ

小松建彌夏月備後守
作次郎

れうきあめうさ
あつらひのつれ

渡邊程津田録守
清藏

ささきの海も
あつらひのつれ

村田春丸村田
次次郎

長月あつらひ

~~~~~

桑田野川良長門

~~~~~

隅田之帖浪人隨文

~~~~~

澤近嶺下後取手與共衛

~~~~~

~~~~~

村田多世女浪人村田春海

~~~~~

嶋岡近藤河守家士嶋岡若門妻

~~~~~

菅六益同藩士雄次母

~~~~~

きくりい水

小山田の女将曹妻

うりいんをふのふふふ丸のふにまふふふ

ゆふりいふふ

行の上人本竹霊山寺

昔いふふふふふふふふふふふふふふ

いふふふふ

大基上人若川傳道院
学頭

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふ

秋大会傳道院會
下

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふ

新真定芝増上寺
會下

いふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふ

権大僧都道隆筑玉橋
別當

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

秋のつらき月夜

秋定隆傳通院會下

秋のつらき月夜
今も昔も
菊のつらき月夜

釋大祝同

秋のつらき月夜
今も昔も
菊のつらき月夜

釋貞旭同

秋のつらき月夜
今も昔も
菊のつらき月夜

秋のつらき月夜

釋貞成増寺會下

秋のつらき月夜
今も昔も
菊のつらき月夜

尼常照町与力磯貝
七郎丹

秋のつらき月夜
今も昔も
菊のつらき月夜

小山田與清

秋のつらき月夜
今も昔も
菊のつらき月夜

松の影を
うつす山に
あそびて
あそびて

久米博高 水戸藩士

一自菊花輸帝鄉紫宸殿上
看綠竹蒼松外霜露風前晚節香

鈴木胤 同藩士 佐未年十郎

綺席會盟与菊用共將
言七百餘年齡對酒新添又幾回

松

渡邊轉

時雨の音を
かきしめ

天野政徳

あそびて
あそびて

仲田顯忠

咲つゝ
あそびて

なつかしき夕暮

藤原善一

清く静かに暮らすは人の世の幸なり

~~~~~

藤原正巳

あまのこころのちかき中 松竹梅の

~~~~~

藤原政春 所与力
七五郎

あまのこころのちかき中 松竹梅の

あまのこころ

山本重吉

あまのこころのちかき中 松竹梅の

~~~~~

桑根方久

あまのこころのちかき中 松竹梅の

~~~~~

岡田利和

あまのこころのちかき中 松竹梅の

いんげんがうす

おと美澄

おんがよみかほむかきもすいんがよみかきん

おんがよみかきん

吉村氏

おんがよみかきん

おんがよみかきん

白方忠友

おんがよみかきん

おんがよみかきん

招山正幹

おんがよみかきん

おんがよみかきん

加時倚

おんがよみかきん

おんがよみかきん

鍋本幸雄 神明宮 福直

おんがよみかきん

おのゝとていふ

小田原へ

巾の海内をたぐるにふしむるは

行阿上人

子地をたぐるにふしむるは

ちまへ上人

流波張の海内をたぐるにふしむるは

いふに

権大僧都通階

神代にいふにのりていふに

釋真定

いふにのりていふにのりていふに

釋大念

いふにのりていふにのりていふに

おほの庵や

釋定隆

とちよかいついあて家かあはらひたの
海路いそく

釋大観

教名ぬのそきしはしそいしあはく
いれか原

尾常照

回踏しつりしあてあはくあはくあはく

やよの松れ歌ふ

小山田与清

おほの松れ歌ふ
おほの松れ歌ふ

平戸の海軍のあはくあはくあはくあはく
肉つ毫をさぶ

十六日晴今日けめて小石川の御屋形の史館も
ら富岡のあはくあはくあはくあはくあはく
は書とていそく又扶桑拾葉集の海歌

此とよはば... 此書ハ

西山黄門の君... 字を以て

おや... 西山黄門の君... 字を以て

今... 西山黄門の君... 字を以て

その... 西山黄門の君... 字を以て

道... 西山黄門の君... 字を以て

殿... 西山黄門の君... 字を以て

... 西山黄門の君... 字を以て

... 西山黄門の君... 字を以て

史... 西山黄門の君... 字を以て

中... 西山黄門の君... 字を以て

三字の類... 西山黄門の君... 字を以て

西山... 西山黄門の君... 字を以て

来... 西山黄門の君... 字を以て

史館警言

一 會館者可辰半入

未刻退

一 書策謹不可汚壞

紛失之

一 蠶談諍論宜最戒

之

一 論文考事各當竭

力若有他所駁則

虚心議之勿執獨

見

一 在席勿怠惰放肆

大抵諸君之社武天皇より後少松帝由りの下紀

いふ之氏法臣の列傳を史侯の體に據るを以て

之中に社初皇后を后妃傳に大友白子に社帝紀を載

き之種神器は若くは之をたすを也南朝

を心統とてふなり

西山公は御決新を以て之を法徳に以て

識編ありて御顔を以て祀りて之を輩に

之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

後世を最に之を以て之を以て之を以て之を以て

中の上の服返通用口上向紙名

存上

今日富岡まで見せし高葉集を講読し又高葉
葉集中の四十八願なる故事をききしやまぬ
十月朔日晴辰打下りし所を祈りまじし
厨計目小袖麻上下を着ていし富岡水道橋
をくぐり出迎し例の西南に河通用門を入り中
れ口より登りし沙坊士福田松林豊田安喜葉
内して一間所へ就し御同朋鈴木元阿弥山方

啓阿弥河合甚河弥玉造疎阿弥を出てあり
らふしは帰るまじしとてまじしとて馳ち
いれしをみよしとてあはれしとて
御玄関より沙厨下けしとて道へも
余は御廊下の間れす許の所へ右乃傍りし
平伏せし御小十人頭名越氏藏字十余をなま
し入御の後もあつ百ふりしはまじし
即吸物や肴をみよし次は椀飯をみよし汁菜
みて御焼物肴をみよし末は何をもみよし

い流きて御家老中山備後守興津長門守御側
御用人鴉殿氏字平 御用人飯田氏字総 御側
許をとらひて今日に御息はつとてなれり
しをり

中々おるもやうてはる月をさるる

かやあやうれ

とてふ文の木の木はあまのり
言は月をけなむらうり

利和

故黄門は君乃御三回忌の御哀傷の御歌の御歌

草紙写しを出一つ評しつゝ御まじり
る癪を以玉の御作などハおる
と御みはるゝ意詞を書きし
とてふやとてふとてふ
とてふ書とてふ

二日曇久米博高りも
とてふは成若とてふ
はるるもたしとてふ
とてふ

小石川清平の海軍の功を記すに當りては
あつた

六日頃の事未詳なるを以て小石川清平氏
の功を記すに當りては御通事戸田氏字銀次郎
らに倭唐の事なるを以て記すに當りては申
訪るにや一なるに於て御通事戸田氏字銀次郎
一を以て又今も六月の六の日、又維新
の事なるを以て記すに當りては定むるに當りては

わの事なるに今も六月の六の日、又維新
の事なるを以て記すに當りては定むるに當りては
あつた

大橋系平富岡利和の景紀水谷昌年相時
倚同時習山平達長岡根方久々来ははれ
りては書も講解も鍋田善人名三平も
あつた

つる河の流のりは殿鍛冶橋の邸を集ま氏
をまゝく通鑑綱目四編を編むる
は殿の御世を傳ふに御ま、沖澤を以て武田
某字幸右里見某五郎右衛門を出てありらぬ
九月晴柴田幸右衛門やうましくは殿
にまつる通鑑綱目三編をふるに御ま
しむるも歎

あやうまの流のりは殿鍛冶橋の邸を集ま氏
をまゝく通鑑綱目四編を編むる
は殿の御世を傳ふに御ま、沖澤を以て武田
某字幸右里見某五郎右衛門を出てありらぬ
九月晴柴田幸右衛門やうましくは殿
にまつる通鑑綱目三編をふるに御ま
しむるも歎

流のりは殿鍛冶橋の邸を集ま氏
をまゝく通鑑綱目四編を編むる
は殿の御世を傳ふに御ま、沖澤を以て武田
某字幸右里見某五郎右衛門を出てありらぬ
九月晴柴田幸右衛門やうましくは殿
にまつる通鑑綱目三編をふるに御ま
しむるも歎

己を至る方くもしとて一から一なるに志す
其流のこ^凝してあつたる^外くその事也
と^{トキ}解明の^中に^カは^レれ^ル事^ハは
く^レる^國の^ゆえ^ニも^ハあ^レれ^ル事^ハは^レる^事
し^カも^レ代^マり^もあ^レる^事は^レあ^けて^はは^レる^事
濫^云漢^國籍^教を^ある^事を^ある^事を^ある^事
れ^うて^おし^こま^とり^しく^しの^國に^ある^事
れ^はも^れる^事は^レあ^らず^にあ^らず^にあ^らず^に
し^こり^にあ^らず^にあ^らず^にあ^らず^に

し^こり^にあ^らず^にあ^らず^にあ^らず^に
し^こり^にあ^らず^にあ^らず^にあ^らず^に
し^こり^にあ^らず^にあ^らず^にあ^らず^に

十日曇れ^る事^ハは^レ成^れる^事も^あら^ず
ぬ^カ石^門の^史館^ト大^法法^教を^のり^まぬ^事
富^田和^林業^拾葉^集を^内典^也なる^事
し^こり^にあ^らず^にあ^らず^にあ^らず^に
し^こり^にあ^らず^にあ^らず^にあ^らず^に
十六日晴^也史^館より^しづ

十六日晴風はゆるぎありて耳に風を感ずる如し此書は清
流より富岡利和より景紀より萬葉集を講授
し

廿四日晴利和を来て一万余巻をく

廿六日史館よりく

廿八日利和景紀講席よりく

十一月六日晴史館よりく今宵鳥羽景紀の家
に伊勢物語を講じ聴衆西原六郎中島吉兵
衛河原田金次郎酒井源十郎

八日久米博高よりく磯原抄を講授し

十四日晴地蔵よりく伊東景集中に紙教を

く

十六日晴風はゆるぎありて史館よりく

く

廿日利和よりく元文大嘗會に悠紀方主基方

はるまじ及作者は事をいふにたれは

注しつ雲御抄の流しを書きて御しつ

廿六日史館よりく

廿八日晴利和博高まゝ々々扶桑拾葉は難義
を乞ふまゝ

十二月四日晴博高景紀まゝ取れは道一の書

を講人

六日晴史館まゝの興津長門守主鶴殿

年七飯田総元柴田十元戸田銀次郎

今宵多の系紀の家を伊勢物産

海兵衛六郎櫻村安右衛門酒井源十郎河

原田令次郎青山才七郎永畠永元山幸彦七

郎安原宗右衛門を席に流るる

八日晴博高まゝ

十二日晴博高まゝ明日

相之公に御婚礼を賀し奉るは心おこや

ぬ河合瓢河弥山方啓河弥まゝ

まゝ

十三日晴已のりな厨下目麻上下より御屋形

ありて御中より一問所より

まゝ佐藤捨藏名恒まゝ

ふんせいでし

十四日晴例のくまはひいれはれは色は書海
流せき久未は高が松葉拾葉集中難義の問
ふふふ富国利和此は風草の中ふふふふ
ふふふ快ふふふふふふふふふふふふふ
こ

十五日晴博高ふふふふ奥羽観迹園老志定
借ふふふふふふふふふふふふふふふふ
松葉拾葉集注の料

十八日朝ふふふふふふふふふふ雪ふふふ
ふふふ未は高大塚庄藏法輪院省遍渴田を人
ふふふふふ古事記職原抄を講録
ふふふふ大塚市郎左衛門か子少字都宮城主は飯
戸田因幡寺は流ふふふふふ祖文を市郎右衛門橋嘉
樹ふふ山科流の衣文家少ふふふ伊托力平藏
貞丈ふふふふふふふふふ著書はふふ
中ふ百寮訓要は別注最ふふ法輪院ふ南都
薬師寺の衆徒也

廿二日晴今日御座形より此の如き事ありしを
河原がわらわらうしおとせられりとの厨計目麻
上下より

相公殿様の御目見よりつ返昌成平田葛原前田
友彦様より一書不よりあやまらば事つてあ
町をさすまをぬ

廿四日晴富岡富太郎久米彦助消息して
お多殿様より申附より此の如き事ありし
也控ひてお銀之取より御座りしおとせぬ

申此時より多羽茂を即まで来て酒井源十郎
をけぬより一書不よりあやまらば事つてあ
う返付より申一江戸御座形水戸御領内の
をそ余の門下より申すも此士庶人法師社有る
一男女凡て五十人ありし中鳥羽景紀一人
御座りしおとせぬ今より相識同僚をさ
しひしよりさす道より一書不よりあやまらば事
つてあやまらば事つてあ

廿五日晴中山備前守主興津長門守主鶴

殿平七飯田総蔵柴早花戸田銀次郎
御玄園より〜〜〜恩賜の辱き〜〜
名簿より〜〜

史籍より〜〜銀

お領被 御旨宜なる物難有任

金子おん右行札

富国利和末博高〜〜〜
〜〜〜荒波山の沙彦〜〜〜
流の〜〜〜

〇〇

〇六日晴利和博高〜〜〜末脩の寺令を
〜〜〜今日新殿氏〜〜〜家産の河伯は
假面を

相々殿様より〜

〇七日晴平戸海主の殿より國着は〜
〜〜〜越前を佳品と〜津軽平戸は
〜〜〜山手磨河弥〜〜
おと殿様御目見上り事〜

只日晴北風烈御屋形ももてしんのかしつ日
是はなを〜宇田等統もてて席をたれり
いよ〜武家廿六日の礼節元文三年十月廿五日
教朝望のお廿六日登城拜礼い〜たれは二
七十三は五箇月而已して三五六九十七は七箇月
もこの儀をい〜大小名前もい〜たれは
今よこの定はもその時許家もい〜たれは鳥羽
景純酒井源十郎おもてい〜たれは武家名
家も撰りい〜たれはい〜たれは

吉田今世水戸よりい〜たれはい〜たれは
い〜たれはい〜たれはい〜たれは

廿九日晴博高利和ま〜

晦日晴平戸乃海主の御い〜たれは
い〜たれはい〜たれはい〜たれは

い〜たれはい〜たれはい〜たれは
い〜たれはい〜たれはい〜たれは
い〜たれは

天保三年壬辰天保と云々
松屋等記と云々

正月元日巳酉晴 病床試筆

二月十日
三月の望今年四月十日
止固と云々

四月十日
五月十日
六月十日
七月十日
八月十日
九月十日
十月十日
十一月十日
十二月十日



七々年非猶有餘始知天命既難踈也
女色葷鮮食糜世貧生為讀書

何れも心自若し
わ

二日晴病床ありて

立春

三月十日
四月十日
五月十日

春菜

目... 身... 若菜...
...

...

...

三日雪...

四日晴

五日曇...

六日晴山方啓阿弥...

...

...

七日晴今朝...

...

麻上下を著目...

...

御目見...

...

中... 郎... 氏... 氏... 氏...

戸田銀次郎立原甚右郎鈴木元阿弥河合瓢河
孫山方啓河孫多ね平馬富田富右郎松延玄
之なとと玄国を病て賀正の礼をのみ今日河合
のり液より印役して塩雁をよぶ

八日晴竹尾善能平田大角久未彦助畑敷馬
上系昌右郎感應寺海侃上人西教寺潮音法師
木村定良なまのり液して賀正の礼をのみ随
時園より登名せし今日野渡氏やの書し
お多殿様より河合板の搦本二帖をよびました

趙子曰御多るう一本の未投化の人の有蹟之富里
利和も十七日十八日鐘は流るうまはるう清く
流るうまはるうおのり液して料紙をよびて耳に
九日晴野渡氏よりて賀正の恩賜れりし
郎のりのり液して中山橋後ちまを身儀のり液して
道隆園梨白井才三郎主方目由後ちま小松
建統戸川鏗右郎主神保修理主越川越中ち
主少林氏田兵衛号空也者及盈液を留り山名春
大塚市郎右衛門のりのり液して賀正の礼也

少くも之来博高まて其之を以て事
相之様御下問はるる所を延源氏夕顔の詞
を抄出 河海細流新釋なる説を載るる
所對して開眉と云ふ字面未弁の詩を
多しとせんは其の再考を乞はるる所
なりと云ふは笑を乞はるるも其の
少て同義なる書法にて云ふは
十日晴富岡利和の詩を料紙に云ふ
ふらふら

春日詠名所霞後歌

平山田與清

此の山は春の霞
まきまきと云ふは
うはまのれ

春山

春日の山は霞
まきまきと云ふは
うはまのれ

春祀

梅の枝をくぐりて

うき多しのたはむ川代

谷のたはむ

松浦静山殿 清和 たるた文書をよむとほい

多たき玉三月二十日源頼貞あふ何人

らむいふいふ文仲新田頼貞打取

与堂凶徒等為誅伐引率軍勢馳奔

被致軍忠とあふ武家方源氏の人た

細川八郎四郎頼直と弟瀬岐守頼春と

う系向ふく

十一日晴佐藤吉まて耳て門より

ゆきとせしあま

十二日晴河波の少将の殿朽木兵庫助

増上寺大僧正念天徳寺香阿上人稻垣素

平 沼津 山木庄左衛門 高取 結城弘経寺巨束上人

芝山 藤 顕察法師悦憚法師巨道法師了義

法師演々法師貞成法師沙 山上 葛原院山

御別 清光寺顯帝上人 笠坊 鍋木内膳 芝神明
齋藤 好恰 村上 新左衛門 已上濱田藩士 廣國 五左衛門
門集堂 小平 太山川 此面井出 嘉一 郎 廣里 治部
右邊里 見左 五郎 此 武田 幸右衛門 已上河内藩士 磯貝 七五
郎 三村 源三郎 中村 八郎 左衛門 已上河内藩士 左田 傳次郎
村田 右で 女 なと も は 活ふ 賀正の あこ
十三日 晴 河内 彦 う 御使 あ 守戸 増 ま 以 激 あ
邸 同 所 隱 居 靜 山 殿 邸 中 の 峯 中 勢 慈 澤 小
膳 吉 村 市 郎 左 邊 守 田 部 少 左 邊 貞 方 文 作

吉川 東一 已上平藩士 篠原 貞藏 鳴嶋 邦之丞 主 靈山寺
貞典 上人 天野 氏 書 渡 辺 孫 左衛門 主 小山 氏 本邸左
富田 八郎 和田 源太郎 杉江 氏 孫 松長 氏 長三郎
蓮阿 前田 健助 市村 瀧太郎 なと も は 活ふ 賀正
此礼 を あ ふ

十四日 晴 関 置 長 右衛門 石坂 宗哲 法眼 付 洲 五郎
濱田藩士 長谷川 平 彦 ま は 活ふ 正を 賀 ふ
十五日 晴 隨時 園 十 會 は 梅 未 開
十六日 晴 阿州 彦 う 御使 あ ふ

十七日^雨阿州侯より御使あり

十八日雨藏原抄萬葉集浮瑠物終りて講以

久米彦助富岡富太郎鳥羽茂太郎法輪院有

遍渡邊清藏を尋所といぬ古名川平藏主と

りてうき心あり夜に雪風烈し

十九日らるる雪止み雪止りて風烈し

夜に即ち雪止り

廿日晴池河園に梅花を賞り今宵は雪止り

廿一日晴

廿二日晴夜に雪止りて風烈し

廿三日より海は雪止りて晴れ

廿四日風烈し

廿四日晴松浦静山殿より御使あり

月十日の下文乃換字をよむ

をよむ

海白より耳に

佐藤彦吉大塚庄藏渡邊清原を相成り

廿五日雨静山侯より御使あり

廿六日曇秋、雨、西、山、極、て、晴、ぬ、石
川、史、館、も、ま、つ、つ、不、良、御、膳、を、御、進、上、之、
、之、如、く、鳥、羽、景、紀、之、家、を、御、物、語、を、傳、へ、
、此、以、人、来、行、く、之、を、其、の、時、を、家、を、了、る、今、後
、山、部、之、を、ま、つ、つ、不、良、岩、村、を、ま、つ、つ、不、良、
、九、國、の、ま、つ、つ、不、良、東、國、の、ま、つ、つ、不、良、
、ま、つ、つ、不、良、也、大、一、蹴、鞠、を、ま、つ、つ、不、良、
、橙、と、似、つ、味、は、お、お、人、は、如、類、也、
、廿、七、日、曇、秋、入、て、雪、ふ、り、ぬ、吉、村、一、郎、在、東、門、の、ま、つ、つ、

廿八日晴北風烈、雨、西、山、極、て、晴、ぬ、石
川、史、館、も、ま、つ、つ、不、良、御、膳、を、御、進、上、之、
、之、如、く、鳥、羽、景、紀、之、家、を、御、物、語、を、傳、へ、
、此、以、人、来、行、く、之、を、其、の、時、を、家、を、了、る、今、後
、山、部、之、を、ま、つ、つ、不、良、岩、村、を、ま、つ、つ、不、良、
、九、國、の、ま、つ、つ、不、良、東、國、の、ま、つ、つ、不、良、
、ま、つ、つ、不、良、也、大、一、蹴、鞠、を、ま、つ、つ、不、良、
、橙、と、似、つ、味、は、お、お、人、は、如、類、也、
、廿、九、日、晴、平、戸、候、阿、列、侯、に、御、使、を、と、吉、お、出、即
、唐、門、橋、渡、を、渡、り、し、て、ま、つ、つ、不、良、小、倉、大、進、を
、鳥、羽、景、紀、真、文、作、を、ま、つ、つ、不、良、富、岡、利、和、を、ま、つ、つ、不、良、
、又、次、梨、拾、葉、集、中、に、事、を、ま、つ、つ、不、良、又、長、路、を、ま、つ、つ、不、良、
、割、し、て、ま、つ、つ、不、良、
、晦、日、曇、秋、入、て、雪、ふ、り、ぬ、吉、村、一、郎、在、東、門、の、ま、つ、つ、

りて伴信友大橋清年とてそとせり
二月朔日壬辰晴隨時園とて金以歌之有立原
是太節とて此の如くしてとて所とて

二日晴

三日晴鳥羽御衣古節酒井源十郎とて

四日晴久未彦助渋谷保が妻とて女とて保と
越後國蒲原郡高岡村の郷士とて保を久未
とてとて文政十年正月に夫婦とてつとて
つとて歌とて志深一中村宗一加藤守とて

らりて宗一東叡山の齋生也重彦が余が門下と
しとてとてとてとてとてとてとて

五日雨

六日雨長谷川平蔵主とてとてとてとてとて
つとて石川也史籍とてとてとてとてとて
つとて鞭とてとてとてとてとてとてとて
六具の中とて後原那物の雛形とてとて武家の
とてとて元服の儀とてとてとてとてとて
具とて鞭とてとてとてとてとてとてとて

予一と源郎兵衛の物語とて符合せり

七日晴多相景純まこと未比時まじり吉身よしん候也
~~~~~

八日曇東叡山御廟恭也まこと佐藤吉鍋田舎  
人天塚庄藏富里利和相也まこと竹川立我久未傳高  
嶋岡井女作原元亮もとあきら等ら候也  
~~~~~

九日晴渡辺轉主長谷川宣昭主のりあき候也
~~~~~

十日雨

十一日雨濛多轉主のりあき候也

五月廿二日

西山黄門云御追贈のりあき御内書のりあき候也

水戸宰相殿

源義政よしみさだ治事ちじ願學がんでんがく多才たふさ類聚るいご典故こたえ成言なりごと數  
百ひゃく纂さん考こう頗ひん便べん此こ餘あま事こと迹あと有あ益えき不な少すく蹟あと能よ  
遠とほ熟じゆく年とし來きた

御歎美候依之被為

廢將大進贈從二位權大納言

平去五七日

宣下有道之取後

京都 御進依之 御使

以進以

廿三日御禮官位乃河祝事あり余病臥  
之より此より河進事戸田銀治郎  
長歌をよ

天保三年五月廿二日故

西山黄門公二品亞相御追贈之時

恭賦奉備

相公公之御覽長歌并短歌

平小山田与清 謹上

久方公之御覽。長歌并短歌。御進依之。被為。廢將。大進。贈從。二位。權大。納言。平去。五。七日。宣下。有道。之。取。後。京都。御進。依之。御使。以進。以。廿三日。御禮。官位。乃河。祝事。あり。余病。臥。之。より。此。より。河。進事。戸田。銀治。郎。長歌。をよ。天保。三年。五月。廿二。日故。西山。黄門。公。二品。亞相。御。追。贈。之。時。恭。賦。奉。備。相公。公。之。御。覽。長。歌。并。短。歌。平。小。山。田。与。清。謹。上。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。

六月廿五日 鎌倉 和崎高二人  
江村玄松葉集二巻 五月廿五日 鎌倉  
訂正を乞ふ。おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。

十日 鎌倉 田原 鎌倉 田原 鎌倉 田原

おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。

六月十日 田原 鎌倉 田原  
おはようございませう。おはようございませう。  
おはようございませう。おはようございませう。

即引終と下右用お石川所屋形少納言印一戸田  
銀次印印仰の昔も得ふよ、埃茶拾葉集の  
幕府御臺様より仰あまを注進し進め  
る今近、富国富太郎久米彦助兩人を所  
迎の門人より史籍も探して注進せしめし言  
加へて定規をばせし平書文の月もあはれ  
りや  
お名殿様もいふと心もなやむ候にせむ  
今より遊遊もなやむと下し自家を注進

又しよむねとて史籍もまらぬと三人もあはれ  
持示し注進せしめしれ作は趣も得ふ余の  
あまもまを玉端はあまれし  
十二、富国利和もまらぬと嘆息し事を考  
へしよむねとてれ作も得ふまら古画巻の中  
硯をばし文房の具は古画巻の中  
しよむねとてまらし迦画巻類をまら  
し利和も附  
十三、唾壺の面及古書はあまらし



まゆらひのる麻呂と稱よのゆき一ち清く  
進しひききし利和とさきやあらせぬふ  
十甲のまねもしく利和麻呂を所一鶴殿  
氏しきまもこましく一清誕生れ  
若君は御名を  
御母堂山書院極くまもせぬまも  
鶴子代麻呂君と稱まもこましく一清のまね  
及まゆらひのる麻呂

麻呂と早下の詞ふは賀茂真淵説

賢カシコキをカドアリと云々對してカドけりカド同  
と云意や愚オロカゆる由の稱と云々此説  
又自稱多礼の詞ゆき枕草子春曙抄  
二の卷十御前オノマヘして物をゆきまもこましく  
くまはなまもこましく九クがなまもこましく抄中帝の  
聞キコシ下シタりて一清上人をまねてを  
丸マがなまもこましく至尊オホミと稱  
故也是も詞無礼やまねぬ故オロカなり  
まゆらひのる麻呂と稱まもこましく一清のまね



戀ふ

夏草の志がなほ春の草より春の草より

多分海より相いし同窓中

婦人のやうな心づから

人を思ふ心づから

打もつて君の心づから

今もなほ心づから

身等れば我も心づから

有て蜀志張飛傳に飛撮水新橋瞑目

横身曰身是張益徳也

又他を指てとて

己の事とて

古事記上巻に源佐之男命遠望呼

大穴子遠神意礼記にも是奴も

親て意礼とて御許に石仕

ひの心之是奴とて

神武紀に虜雨所造屋雨自居之

例とあるに虜の心づから

爾ら自身より自身かきこもる空す八自身入  
居し枕草子春曙抄十の巻十二下下郭をたほりて

おしおきそこれに田やあるに郭かきこもる田  
おとどきそんがさうさう植女が園さうさう又それ

ゴも其等がうられごと彼うし

此等の礼もあつて御辞也これに麻

呂ハ身等これ御事をとむる吾身等

とつとつ物を親愛する御心を京

此等のく名も其麻らるるハママ母はと  
か親愛して吾身の如く思ふこと

くも古くも継辭紀に麻呂古きあり後母

を近習の儀後日重んずるに

鳥丸名鬼切丸同名羽丸名大緑丸名鷹阿竹丸名

其の如く刀劔器物生類もさくしなやハ

こまき其の親愛する名に又心解り

御しやるといふも御儀九イナ丸

つふとつとを是もその親愛なるを

少くも御して高貴の児息なり之法  
御九を名づけし御心をたふすも

御名又自然の身等なるは年々  
と御名に下さるるものし  
おき、祿也麻呂を合字に書し、或  
満丸の字を書し、ハカク假名に上り、  
意義ありしなり

吾麻呂考

水戸相公御嫡子御誕生之時御名可  
用麻呂之語邪不耶當勅進之由蒙  
命而所奉考注也

口口日利和... 水車... 注進...  
... 御調度を... 依て...  
... 秦始皇... 陵宋高宗...  
... 石池... 類漢... 例あり

七月六日史館より御詠草を下し  
活前より御詠草を仰せ

あお川流は志をたぐひて水ぬき  
もよほりてくたれし御詠草を  
もよほりてくたれし御詠草を  
れ有車の礎石より御詠草を  
七日九月十三夜は御詠草を  
乙未三助 御仰の御詠草を  
御高うあらはれし御詠草を

七月十五夜

宰相中將は君の御詠の御詠草は通事  
銀次郎より御詠草を仰せ  
奉る書

御詠草の御詠草を仰せ  
御詠草の御詠草を仰せ  
御詠草の御詠草を仰せ  
御詠草の御詠草を仰せ



乃假名うきてとて... 文法のお  
と... 打...  
...  
... 高根を白妙...  
...  
田子の浦...  
...  
... 富士を御賞覧

浪の縁語を... 富士を御賞覧  
...  
十六日... 御誦草紙を  
下... 春書



原とのくらふもさしあはれし思ふは  
ふも月事よまを侍りぬ又申す  
仲秋十五夜はさしあはれし  
ふもさしあはれし

風よあやめぬはるの夜はさしあはれし

新しき心の中をさしあはれし

と物つらきあはれし  
と物つらきあはれし  
と物つらきあはれし  
と物つらきあはれし

八月廿四日利和をさしあはれし  
院はさしあはれし  
平・國海をさしあはれし  
と物つらきあはれし

九月九日御屋形をさしあはれし

噴

御前

廿二日扶桑拾葉集第十九卷に収めし椿葉

記は活新をさしあはれし六月十日

命をまはせ成風眼を痛むるに似て  
眼をまはせ成物に似て  
とあるを十行の御書に  
はなれし御書に  
やまされし御書に  
おこしめし御書に  
のりし御書に

十月十八日御書に書つた御書に  
の沙路草を御書に

御書に利和御書に

小路山

御書に御書に御書に

御書に御書に御書に

御書

御書に御書に御書に

御書に御書に御書に

御書に御書に御書に

御書に御書に御書に

口一日生魁二隻之賜云々御領国那河郡  
如産云々

西山贈亞相公如御代云々年々京都道  
献一御了多系云々成云々并云々  
下云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々

十月廿二日御代云々云々云々  
清言云々云々云々

扶桑拾葉集第十九卷所収之椿葉記

中

柳菴御臺盤所 後任志計子近衛国自殿  
御如寶篋摩中持殿女也

御問之條目可奉注進之天保三年六月十日受

水戸相公公之命 雖然嬰于目疾不能採

亮 後經光陰八十許日于此至九月念一日

始對机十一月念二日脱稿實起於甲子終於

甲子 仲間 六十日而奉進覽之者也平小山田

与清謹識

口四日利和云々云々云々云々云々云々云々

御歌を

ふらふら川流に、あふあふを流す川

あはれも久きあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

廿九日御通事伊藤十右衛門文一が御歌

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

はらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

はらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

はらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

はらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

はらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

はらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

はらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

十二月十日の御歌

源草の流前はらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふはらふ

御歌を

御祿草の寫

十二月廿二日

琉球の朝典の國の

白雪のうたをよみしる

しるしをたづね

朝典の文の

よみしるしをたづね

しるしをたづね

しるしをたづね

よみしるしをたづね 御祿草をよみしるしをたづね

白雪のうたをよみしるしをたづね

しるしをたづね

よみしるしをたづね 御祿草をよみしるしをたづね

よみしるしをたづね 御祿草をよみしるしをたづね

よみしるしをたづね 御祿草をよみしるしをたづね

よみしるしをたづね

よみしるしをたづね



記しそむしむるを原と爲しは後と爲し  
有栖川親王宮に御息所と爲しは今  
水戸に少の宮と爲しは今  
廿四日富岡利和久未博高東脩也礼と  
名方金二百両とありし事なり

